日本言語学会第 147 回大会

発表要旨

The 147th Meeting of LSJ
Kobe City University of Foreign Studies
23-24 November 2013
Abstracts of
oral presentations, workshops and poster presentations

<<口頭発表 Oral presentations>> （2013 年 11 月 23 日）

【A 会場】司会：[1-2]今里 典子　[3-4]川澄 哲也　[5-6]定延 利之　[7-8]斎藤 倫明

[A-1]

日本手話の非手指移動表現についての一考察

高嶋 由布子

本発表では、日本手話の空間移動表現のイベント構造を、非手指要素に注目して分析した。手話の空間表現は図像的だが、パントマイムとは異なり、1 つのイベントに含まれる複数の要素を分解して、時間に沿って表現する。これは音声言語の線型性と一致を示し、Talmy(1985)の移動表現の類型論上でも議論できる。今里（2007）は、日本手話は経路を動詞主要部で表す動詞枠づけ型言語であると主張した。ただ、日本手話では移動は手指だけでなく非手指要素でも表現されるが、先行研究では手指要素しか検討されていなかった。

そこで、移動以外の様態の継続を手指で表現したまま、空間移動を表す事態に着目し、アニメーション再生課題を用い、この移動イベントの表現を収集した。このデータに基づき、移動の非手指要素による表現には足を動かす様態と、腰を起点にした上体の位置変化による移動表現が頻繁に使われること、様態より位置変化のほうが優先されることを示した。

[A-2]

日本手話における「いる」「ある」交替と叙述の種類

原田 なをみ・高山 智恵子

本発表では日本手話の存在文について考察する。アメリカ・クロアチア・オーストリア各手話では、言語によって HAVE または BE のどちらかが存在文に用いられる。一方日本手話で存在を表す際に、述語は「いる」と「ある」の二種類が用いられるが、両者の意味的・統語的な分布に関してこれまで体系だった研究はない。日本手話の「いる」「ある」の分布を調べるために、2 名の日本手話母国語話者（40 代男性と 60 代女性）にインタビューを行った結果、「水族館　魚　{いる/ある}」のように、どちらの述語も可能な文も存在することが明らかになった。手話話者の「水族館には魚がいるに決まっているため、『魚　ある』のような表現はそもそもおかしい」という直観に基づき、日本手話の「いる」「ある」の交替は、文全体がガ格名詞句の恒常的属性を叙述しているのか、それとも一時的な状態を叙述しているのかという意味的性質が規定するという分析を示す。

[A-3]

山西方言における果摂一等韻母の歴史的音韻変化

中野 尚美

中古漢語における果摂一等韻母の音形は、開口[-ɑ]、合口[-uɑ]と再構されており、現代北京方言では開口[-uo]、合口[-uo]となっている。多くの北方方言における果摂一等韻母の音形が現代北京方言と類似しているのに対し、山西方言における果摂一等韻母の音形には多様性がある。
北京（北京官話）・西安（中原官話）：開[-uo]合[-uo]
昆明（西南官話）・南京（江淮官話）：開[-o]合[-o]
済南（冀魯官話）・霊武（蘭銀官話）：開[-uə]合[-uə]
清徐（山西）：開[-ɤɯ]合[-uɤɯ]
汾西（山西）：開[-ɯ]合[-u]
嵐県（山西）：開[-iɛ]合[-uɛ]
霊石（山西）：開[-ei]合[-uei]
果摂一等韻母の音形が北方方言では画一的で、山西方言では多様性があるのははなぜだろうか？果摂一等韻母の変化は、多くの北方方言では開合口の対立維持という中古漢語以来の原則から逸脱しているのに対し、山西方言においては当該原則に従っている。本発表では、開合口の対立維持という原則から山西方言における果摂一等韻母の多様性の説明を試みる。

[A-4]

孤立的反復の文法的理解 ―日本語と中国語の VN 型合成的表現を例に―

程 莉（てい・り）

本発表は、呼応のような文法システムに関わる反復だけではなく、孤立的な反復（“salty sea”のように共起する 2 語の一方（“sea”）が他方（“salty”）を予定する反復）に対しても、文法的な追究が可能であることを示そうとするものである。具体的に取り上げるのは現代日本語（共通語）と現代中国語（普通話）の孤立的反復のうち、一方が合成的表現 VN（動詞要素＋名詞要素の合成語）であるもので、その自然さが「VN の品詞（動詞的か名詞的か）」「統語構造（N の反復か V の反復か）」「VN の内部構造と外部構造との関係」といった文法的要因によって変わることを示す。さらに合成的表現 VN の品詞を律する原理に関して、日本語と中国語の間に相違があり、日本語は「VN が和語か漢語か」、中国語は「VN の V が自動詞か他動詞か」といった要因によって品詞が異なることをも論じる。

[A-5]

「だけ」と「ほど」に見られる比例のあり方の違い―定量化という観点による考察―

蔡 薫婕

程度表現は「ほど」のように状態の度合いを表すものと、「だけ」のように量を限定して度合いを表すものに分けられているが、両者は共通して「前件の度合いの増減に応じて後件の度合いが増減する」という「比例」の用法を持つ。本発表は「ほど」と「だけ」に見られる比例は「定量化」という点で区別されると主張する。定量化とはある一つの一定した基準点に事柄の現状を照らし合わせ、度合いを明確化することである。「だけ」の前件には固定した基準点があり、前件の度合いが明確に捉えられるが、これを定量化された比例と呼ぶ。一方、「ほど」の前件は基準点が一定せず連続的に変わり、基準点が変わる度に度合いも変わるため、度合いが相対的に捉えられる。これを定量化されない比例と呼ぶ。最後に定量化とスケール構造との関わりも示す。

[A-6]

イ落ち構文をめぐる二つの視点－全体か部分か－

今野 弘章

現代日本語の「イ落ち構文」（今野 2012、例：「うまっ。」）に対し、今野 (2012)と Tateishi (2013)によって異なる二つの見解が提案されている。今野は、イ落ち構文が通常の形容詞文には見られない形式的・機能的制限を受けることを示し、当該構文を構文文法（Goldberg 1995）における意味での「構文」と捉えている。一方、Tateishi は、イ落ち構文を構成する促音を意味的実質を伴う文法的接尾辞とみなし、当該構文を（形容詞に限定されない）語幹への促音付加という一般的現象の一つとして捉えている。

本発表では、イ落ち構文に対する両アプローチのどちらが妥当かを経験的に検証し、次の関連する二点を主張する。(i)イ落ち構文は、促音そのものには還元できない形式的・機能的特殊性を持つ。(ii)イ落ち構文は、語幹への促音付加と関連してはいても、日本語の文法体系における独立構文と考えられる。

[A-7]

日本語における二重他動詞由来他動詞の統語構造と意味

山口 貴也

本発表では、二重他動詞由来他動詞を扱う。このタイプの他動詞は「教わる・預かる」などが該当し、二重他動詞と*-e-*/*-ar-*の交替を示す。従来の研究では、二重他動詞由来他動詞は統語的な受動形態素-(*r*)*are*を用いた受身と区別され、語彙的受動態とされてきた (田中 2012)。本発表では、二重他動詞由来他動詞の主語が動作主である事実と受身文の「に/によって」句の先行研究から、二重他動詞由来他動詞を語彙的受動態と分析することが適当でないことを示す。まず、動作主指向副詞との共起や Hoji, Miyagawa and Tada (1989)に基づいた星 (2013)の VP 前置の分析を用いることにより二重他動詞由来他動詞の主語が動作主であると示すことが可能である。加えて、Kuroda (1979)の受身文における「に/によって」句の分析から二重他動詞由来他動詞を受動態として扱うのは適当でないことが考えられる。以上の事実から、二重他動詞由来他動詞が語彙的受動態とする分析が適切でないことを示す。

[A-8]

日本語「X は Y が Z」構文の主語と述語の尊敬語化

吉田健二・島崎冬彦

日本語の「X は Y が Z 」の構造をもつ， いわゆる二重主語構文の容認可能性（Acceptability）が，要素 X と要素 Y の関係がどの程度緊密かによって異なるという予測を，37 名の若年層日本語話者の 13 種類の文の評定によって検討した．その結果，検討したタイプの構文には，(i)敬語の有無にかかわらず容認可能性が高い文，(ii)敬語の有無にかかわらず低い文，(iii)敬語ありだと低くなる文の 3 種が見出された．敬語の習得時期の遅さを考慮して 34 名の中年層に対して実施した追実験もほぼ同様の結果だった．この知見は，この構文の述語の尊敬語化の成立に，要素 X，Y，Z の意味構造の違いが関与する可能性を示し，述語の尊敬語化を誘発することが主語という統語範疇の機能（の一つ）だと考え、これを根拠（の一つ）として日本語に厳密な統語範疇としての「主語」を認める分析に対して，再検討の必要を示唆する．

【B 会場】司会：[1-2]野村 益寛 [3-4]田村 幸誠 [5-6]田中 英理 [7-8]三藤 博

[B-1]

英語における結果産物指向結果構文

貝森 有祐

英語における結果構文に関する従来の研究では、結果構文を形成できるのは変化事象を表すものに限られ、作成事象を表すものは結果句を付加して結果構文を形成することはできないとされてきた (Horita 1995: 162-163, 宮腰 2009: 225-226)。

(1)a. John broke the vase into pieces. b. John sneezed his nose red.

(2)a. *Mary baked a pie delicious. b. *Graham Bell invented the telephone useful.

しかし実際の用例を調査すると、作成事象を表すものが必ずしも結果構文を形成することができないわけではないことが分かる。

(3)a. He dug a hole deep and wide for the tree, even though it meant destroying his melon patch and cabbages to make room for it. (WEB)

b. I built it [= a wall of the stones] tall so no one could follow and bother me inside. (WEB)

(3) は作成事象を表しているが結果句を伴っているため、結果構文であると考えられる。

本発表では (2) と (3) の容認度の違いについて、(3) の表す作成過程には作成物が生じた後に累積的に進行する変化が関与しており、その場合は作成事象における結果構文が容認される一方、(2) の表す作成過程にはそれが関与せず、従って容認されないということを論じる。

[B-2]

「N 難民」の意味拡張：メンタル・スペースの観点から

森 博

近年「介護難民」「帰宅難民」など「難民」を後項とする複合名詞が増えつつある。これらは、元の「難民」の意味から一部の情報を排除し、一部の情報を保持している。本研究はメンタル・スペース理論（Fauconnier & Turner 2002）の観点から、その意味合成プロセスとカテゴリ拡張を分析する。複合名詞における二つの名詞の関係は高度にコンテクストに依存するものの、「N1＋N2」全体の指示対象は N2 の下位カテゴリだと言われている。メンタル・スペースの枠組みで説明すると、N1 と N2 は同じ組織フレーム（organizing frame）の中の二つの要素である。ところで、「介護難民」「帰宅難民」などの場合は、N1 がこの「難民」のフレームに同定要素を持たず、N1 と N2 がそれぞれ別の概念フレームに属している。本研究は、N1 と N2 によって喚起される二つの概念スペースを融合させることで、「N 難民」の様々なバリエーションが生み出される過程を概観し、複合名詞の意味形成に対して新たな視点を提供する。

[B-3]

Cognitive Typology and Second Language Acquisition Beyond Motion: The Effects on Change-of-State Framing

Ryan Spring & Naoyuki Ono

Talmy (1985) introduced a cognitive linguistic typology based on how languages frame complex events. Most of the research on this topic has been on motion events, but our research looks at how the typology can be applied to change-of-state events and applies it to second language acquisition. We tested the acquisition of English (a satellite-framed language) change-of-state framing by Japanese (verb-framed) and Chinese (equipollently-framed) learners of English. We found that (i) Chinese learners exhibited an advantage over their Japanese counter-parts, (ii) there were differences in second language production and comprehension, and (iii) there were similar obstacles in acquiring second language change-of-state expressions as were found in acquiring motion expressions.

[B-5]

部分構造の分類について

三山 美緒子

本発表では、日本語等の言語で、選択疑問文や選言的表現を含む構文が部分構造の一種であると主張する。まず、これらの構文において、部分構造に典型的と考えられる「うちの」が使用可能であるというデータを見る。そして、これらの構文に共通する特徴として、「部分」にあたるものに不定語を用い、文中に存在の作用域をとる量化詞が存在しており、不定語を用いていても全称の作用域をとる量化詞が存在する場合には「うちの」が使えないことを述べる。さらに、これらの構文の解釈には、集合を項として取りその集合の要素のうちの一つを返す選択関数(Reinhart (1997))が関わっていることから、部分構造には選択関数が関わるものとそれ以外のものがあることを提案する。選択関数の解釈には存在の作用域を取る演算子か関係していることから、全称の作用域をとる量化詞があると選択関数が解釈不能になるために非文法的になると主張する。

[B-6]

量化の副詞と個体レベル述語

水谷 謙太

本発表では、日本語において量化の副詞 (Q-adverb) と永続的な性質を表すとされる個体レベル述語 (ILP) が共起する際に満たすべき条件について考察する。Q-adverb と ILP の関係を扱った代表的な先行研究である Kratzer (1995) では、英語のデータを用い、名詞の定、不定の違いによる変項の有無と述語の event 項の有無に基づいた Prohibition Against Vacuous Quantification が提案されている。本発表では、この制約が日本語に適用できるかどうかを検証した後、Focus Particle「だけ」の存在によってもたらされる Alternative Situation や、ILP を含む文全体が持つ機能などを考慮する必要があることを論じる。

[B-7]

ホドを用いた程度表現の解釈と構造

東寺 祐亮

ホドを用いた程度表現「驚くほど大きい」は、「かなり驚くほど大きい」とすると、「かなり驚いてしまうくらいの大きさである」と解釈されてもよさそうであるのにもかかわらず、容認性が低くなる。本発表では、「P ホド Q」という表現は「基準以上であれば P だが、基準以下ならば¬P」ということを前提としていると考え、「かなり驚くほど」の容認性が低いのは、「基準以上であればかなり驚くが、基準以下ならばかなり驚かない」という前提が不自然であることによると説明する。さらに、程度表現のホドがこのように二値的に度合いを記述する表現であるという分析のもとで、ホド句の統語構造と解釈の関係を考察する。

[B-8]

一般量化理論と日本語

水口 志乃扶

一般量化理論では限定辞 Q-Det と<e,t>タイプの名詞から一般量化詞 QP<<e,t>,t>を生成する。Matthewson 2001 は St'át'imcets 語で Q と D が融合しないことから、まず<e,t>タイプの名詞句から<e>タイプの DP が生成され、次いで Q と DP から QP が生成されるとした。本稿は D 投射が必要ではなく <e>タイプの名詞をもつ日本語の量化詞を考察する。

本稿では、St'át'imcets 語と同様に、日本語の QP も DP と Q からなるとする。ただし日本語では<e> → <e,t>のタイプシフトによって DP が生成され、DP と Q から QP から生成されると考える。結果、一見「二重量化」のように見える(1)や、中国語の「毎…都」構文も扱うことができる。

(1) [$_{QP}$ [$_{DP}$ あらゆる可能性]に[$_{Q}$（すべて／*ほとんど）]] 挑戦する。

また日本語には非遊離の Q もあり、この場合は<e>タイプの DP と共起し、割合の読みをもつことができると考える。

(2) [$_{QP}$ [$_{Q}$（ほぼ）全員の] [$_{DP}$ 会員]] が集まった。

本稿は名詞のタイプから量化理論を再考察する可能性を示唆するものである。

【C 会場】司会：[1-2]滝浦 真人 [3-4]酒井 弘 [5-6]小泉 政利 [7-8]岸田 文隆

[C-1]

依頼の断り難さを構成する諸要因—日中の文化差と日本語学習に着目して

黄 郁蕾・玉岡 賀津雄・ブラーエヴァ マリア エドアルドヴナ

Brown & Levinson (1978, 1987)は、ある行為 x の持つフェイス侵害リスク(Wx)の大きさは、相手との社会的距離(D)、力関係(P)、x という行為が特定の文化内でもつ負担の度合い(Rx)の３つの要因が加算的に働いて決まるとしている。そこで、本研究では、中国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、日中の文化差と言語学習の影響に着目して、依頼の断り難さを構成する諸要因の影響を、包括的かつ階層的に検討した。分析では、複数の要因の影響の強さを樹形図で視覚的に描いてくれる回帰木分析を用いた。その結果、断り難さに対して最も強く影響した要因は社会的距離であった。次に、力関係および場面の影響が見られた。大枠で Brown & Levinson の理論を支持した。日中の使用言語・文化差は存在するものの、その影響力は弱く、場面により多様性が見られた。中国語における断りの負担度の方が日本語よりも強かった。日本語の学習経験は、断り難さの判断に、微妙に影響することが分かった。

[C-2]

英語の慣習的依頼表現と談話の流れ：
“Do you want to…?”や“Would you like to…?”を用いた依頼の分析

林 可奈子

英語の慣習化された間接的な依頼表現には Do you want to…? や Would you like to…? といった聞き手の

欲求や希望を問う表現（以下、*want* 系依頼表現）が存在する。本発表では、先行研究に見られる調査文脈の限定や具体例の不足といった問題点を克服する手法を考え、この *want* 系依頼表現の持つ特徴を明らかにする。具体的には、映画のトランスクリプトをデータとして使用し、「依頼」を聞き手に何らかの行為を行うよう働きかける一連の交渉と捉え、話者間で相互的に作り上げる談話の流れに着目して文脈情報を重視しながら *want* 系依頼表現を分析する。そしてその結果として、*want* 系依頼表現は主に「協同型」「自発型」「交渉型」の三つのタイプで使われていること、またこれら三つがいずれも聞き手の欲求や関心事を捉えて前面に出しながら交渉を進めるスタイルであり、いわばポジティブポライトネスの特徴を持っていることを提示する。またこのような結果を導いた分析手法の有効性も示す。

[C-3]

「最後の手段としての再解析」再考：日本語の関係節修飾曖昧性における任意の再分析

山田 敏幸・広瀬 友紀

本研究は関係節修飾曖昧性（1a-b）から、文処理における「最後の手段としての再解析」（Fodor & Frazier 1980）を再考する。

（１）火傷した補佐官の運転手が(a)療養した/(b)挨拶した。

先行研究は、オンライン処理では近修飾「補佐官」、オフライン処理では遠修飾「運転手」が好まれると示した（Kamide & Mitchell 1997; Miyamoto et al. 2004）。本研究は、述部間の暗示的因果関係（Rohde et al. 2008）を基に、（1a-b）を因果あり・なし条件としオフライン実験を行なった。結果は、（1b）より（1a）において遠修飾が好まれた。（1b）での近修飾選好を踏まえ、（1a）の遠修飾は近修飾からの再分析の反映だと議論する。（1a）で近修飾も文法的なので、遠修飾への再分析は処理破綻を回避する「最後の手段」ではなく、意味・談話の一貫性により任意にトリガーされると示唆する。

[C-4]

会津方言の疑問文に於けるイントネーションと終助詞の関係

ギンズバーグ ジェイソン・ウィルソン イアン・金子 恵美子・小笠原 奈保美

本研究は、福島県の会津方言に於ける疑問文の文末のイントネーションの変化と終助詞の関係を明確にすることを目的としている。会津弁話者からデータを収集し分析した結果、疑問文では文末になるにつれて上昇調の方が多かったが、すべてがそうとは限らず、下降調になる場合も少なくなかった。この点に関して、会津方言の疑問文は、基本的に上昇調になる標準日本語（木部 2010）と異なるように見える。文末のイントネーションが下がる場合、疑問終助詞を使うのが無標であることも明らかになった。これはおそらく肯定文（下降調）と区別するためである。また、肯否疑問文より疑問詞疑問文の方が下降調になる傾向が見られる。本稿では、会津方言の疑問文のイントネーションの特徴やイントネーションと終助詞の関係をより詳しく説明し、考察する。

[C-5]

L1 言語獲得における複合動詞「X スル」のプロソディーとチャンク化

巽 智子

言語獲得早期の幼児の発話では、複合動詞「X スル」の要素 X、スルの間に分断が見られる場合があるほか、音声的な融合等の揺れが観察される。本研究では usage-based theory の見地から、習得過程を通じて変化する複合動詞のチャンク性には使用頻度が影響すると想定し、複合動詞のプロソディー上の分断と X の頻度の相関を探った。CHILDES（MacWhinney 2000）内の日本語の言語獲得早期（1 歳 6 ヶ月〜3 歳）の幼児およびその母親の自然発話データを対象に、統計的分析を行った。母親と異なり、幼児の発話においてはプロソディー上の分断の数と X の頻度には有意な相関があり、頻度の高い複合動詞のチャンク性がより強いことが明らかになった。また、低頻度のものに比べ、高頻度の複合動詞において融合的音形が多いことも、上の結果を支持する。

[C-6]

日本語受動文における構造的プライミング効果 −文組立て課題を用いた検討−

トウ エン・田中 幹大

本研究は，日本語受動文の産出時における構造的プライミング効果について検討した．日本語の受動文が持つ意味特徴による影響を統制し，文組立て課題を用いて日本語母語話者に文の産出を求めた．その結果，プライムが能動文の時よりもプライムが受動文の時に，参加者がターゲットにおいて多く受動文を産出することが明らかになり，すなわち受動文が持つ意味側面に依存しない構造的プライミング効果が確認された．さらに，実験中時間の経過による構造的プライミング効果の変化についても観察された．

[C-7]

音象徴の普遍性と個別性
－韓国語オノマトペの韓国語・日本語母語話者による判断から－

崔 絢喆・黒沢 晶子

韓国語オノマトペの音・もの・程度の大きさ等を韓国語母語話者(KNS)と日本語母語話者(JNS)が判断する実験を通し、音象徴に言語普遍性と言語個別性のあることを示す。KNS は慣習的な陰陽の対立に基づく音象徴判断（陰>陽、[ɔ]> [a]、[u]> [o]、相対的狭母音>相対的広母音）を維持しているが、JNS は基本的に KNS と反対の判断を示した（個別性）。
一方、一部の擬声語は、開口度の小さい陰母音のこもった音が暗い聴覚印象を与えるため JNS も重く大きいものの音だと判断した。即ち、より狭い母音がより大きな音やものを表すのもまた類像性に基づくと言える。このような判断基準は J・K に共通して美醜、快不快等の抽象的な感覚にも拡張されている。そして、ともに臨時のオノマトペを[a]>[i]とした結果は、慣習的な対でなければ、広母音>狭母音という物差しが大きさの音象徴に関して普遍性を持つことを示している。

[C-8]

中期朝鮮語の補文節について

小山内 優子

中期朝鮮語では「連体形+形式名詞 dA (こと)」による補文節 (dA 補文節) と名詞形語尾-om~-um による補文節 (-om 補文節) が相互に置き換え可能だと言われているが，如何なる環境に於いても置き換えが可能なのではない。本発表の目的はこれら 2 つの補文節の棲み分けを明らかにすることである。本発表の主な観察は以下の 2 つである。まず, dA 補文節は主に知覚や知識に関する動詞の補語として現れるが, -om 補文節にこのような制限はない。特に‘ar- (知る) の補語になる場合は dA 補文節が用いられる傾向が顕著である。第 2 に, -om 補文節は格助詞・副助詞やコピュラを伴って比較的自由に文の成分になり得るが, dA 補文節につく格助詞や副助詞は限られている。これは，通時的には形式名詞の dA に助詞やコピュラがついた形であっても共時的には補文節ではなく，「連体形+dA+助詞/コピュラ」の形が既に語尾の一部として文法化している (或いは文法化の過程にある) ためであると考えられる。

【D 会場】司会：[1-2]那須 紀夫 [3-4]星 英仁 [5-6]越智 正男 [7-8]福島 一彦

[D-1]

Negative Polarity Item in Dhaasanac

Sumiyo Nishiguchi

Maa "person" is the NPI licensed by negation unlike the PPI *maadhat*. Another NPI *niini* "none" is licensed (non)locally while negative concord items are generally subject to locality (Zanuttini 1991, Progovac 1994). *Niini* cannot stand alone as fragmental answer, in contrast with negative concord item *nadie* in Spanish.

NPI licensing has been explained as Agree operation. As *not* is grammatical in absence of NPIs in its domain, Reverse Agree should be the correct account contra Bošković (2007). *Not* carries an interpretable feature that probes the uninterpretable feature of the NPI (cf. Zeijlstra 2010). As the negative marker *ma* and negative suffix can stand alone, *niini* and *maa* carry the uninterpretable feature matching with the interpretable feature of the c-commanding suffix.

[D-2]

A comparative study of Japanese and Mongolian nominals

Lina Bao, Megumi Hasebe, Hideki Maki

This paper investigates Japanese and Mongolian nominals in terms of Watanabe's (2006) nominal system. Watanabe (2006) proposes that Japanese nominals have at least three layers of functional projections between NP and DP, namely, #P, CaseP, and QP, and derives the surface combinations of classifiers, nominals, numerals, and case particles. We will show that Mongolian nominal expressions allow more varieties than Japanese, while the genitive case marker cannot appear before nominal expressions with numerals in Mongolian, unlike in Japanese, and claim that the surface differences between the two languages are reduced to the optionality in agreement between the #head and the N head.

[D-3]

Accusative case in the history of Japanese

Hideki Maki, Naohiro Takemura, Megumi Hasebe

Miyagawa (1989, 2012) and Miyagawa and Ekida (2003) argue that in Old Japanese, the conclusive form of a predicate does not require the morphological accusative case marker to appear on the direct object because it assigns abstract Case. The purpose of this paper is to demonstrate that there are examples showing that the conclusive form of the same verb takes both a bare direct object and an object with the morphological accusative case marker, within the same literary work in the transition from Old Japanese to Modern Japanese, and to claim that the crucial Case system change which Miyagawa (1989, 2012) originally proposes had already started to take place as early as the late 11th century.

[D-4]

The Syntax of Spontaneous Sentences in Japanese Dialects and its Implications for the Structure of *v*P

Fumikazu NIINUMA, Hideya TAKAHASHI

In this paper, we will provide three properties of the spontaneous reading in the *sar(u)* expression of Iwate Prefecture. First, the external argument cannot be marked by the dative -ni. Second, the verb with the spontaneous *sar(u)* do not take the imperative form. Finally, the *sar(u)* expression does involve the existence of an external causer, instead of agent. Extending the idea of Alexiadou's (2010) anticausativization, we claim that these properties can be attributed to stativity in a sentence with the spontaneous *sar(u)* expression. As for the implication of the proposed analysis, it correctly capture what Shibatani (1997, 2000) states about spontaneous.

[D-5]

Topicless constructions as thetic statements in Tagalog

Paul Julian Santiago

In Tagalog, exclamatives, recent perfectives, intensive sentences, event sentences, meteorological expressions, when-clauses, existentials and some sentences with pseudo-verbs lack a topic NP or an argument in the nominative case. Analysis of these topicless constructions provides evidence for the relevance of the thetic/categorical distinction first proposed by 19th-century philosophers Brentano and Marty, revived by Kuroda (1972) and elaborated by Sasse (1987) and Ladusaw (2000), in the grammar of Tagalog. This paper argues that topicless constructions in Tagalog are thetic statements—unstructured, non-predicative assertions of states of affairs. They lack a predication base (topic NP) and can only assign genitive or oblique case to arguments because the state of affairs is simply posited and the entity involved in the state of affairs is presented as part of the event.

[D-6]

移動表現から見たタガログ語の他動性とヴォイス

山本 恭裕

タガログ語における他動性とヴォイスの関係は、他動性の高いものが非行為者焦点構文と、低いものが行為者焦点構文と結びついているとされるが、他動性の意味パラメター(Hopper and Thompson1980)のうちどれが形態統語論と関係しているかに関しては未だ議論がある(Nolasco 2003)。本論では、意味、統語的振る舞いが未だ明らかにされていない第三のタイプの移動表現の分析を踏まえ、次の三つの主張をする。一つ目は、その第三の移動表現が「逆受動タイプの行為者焦点構文」(Nagaya 2009)と平行関係にあること。二つ目は、移動表現における他動性の高低は、ヴォイスの交替よりも細かく分類できること。最後に、他動性の意味パラメターのうち、動作能力はタガログ語のヴォイスの形態統語論に反映されず、被動作者の個別性と被影性が重要であることを示す。

[D-7]

Pair-list readings:日本語に基づく考察

林下 淳一

以下のように、量化表現を含む *wh*-疑問文に対して pair-list answer で「直接的に」答えることができる場合、その *wh*-疑問文は the pair-list reading (= PLR)を持つという。

Q: Which book did every student read?
A: Yoshio read LGB, Suzan Barriers, and Takashi MP.

PLR が可能な環境には制限があり、PLR の分析はその制限を説明しなければならない。本発表では、日本語の考察を基に、PLR が可能な環境は the inverse scope reading (= ISR)が可能な環境と同一であることを示し、PLR が ISR と同様に分析される必要があることを主張する。また、Krifka (2001)などのアプローチが主張する一般化は誤りであり、当該の量化表現が全称量化表現でなくても PLR が可能であることを論じる。

[D-8]

日本語の接尾辞タチ・ラの複数性と特定性について

金子 真

本発表では Nomoto (2013)を出発点として、接尾辞タチ・ラについてまず次の指摘を行う：1) 単複の区別の中和を表す場合がある；2) 特定解釈だけでなく存在解釈も許すが、その場合でも X タチ/ラは、状況、文脈中の何らかの要素に関連づけられる個体を指示する；3)「僕ラタチ」が 2 名の集合を指示する例、「子供タチラ」が子供だけの集合を指示する例など、一見冗長と考えられるタチ・ラの用例がある。続いて、これらの現象は「X タチ/ラは基本的に結合複数を表わし、X の外延は当該グループを代表する」という仮説によって説明できると論じる。そして、X タチ/ラの指示対象の個体性は、X の外延がグループを代表するにあたって課される条件に由来すると主張する。また上記の「僕ラタチ」「子供タチラ」は、「僕ラ全体」「子供タチ全体」と解釈できること、さらにこうしたグループ全体を表す意味は、結合複数用法から派生することを示す。

【E 会場】司会：[1-2]寺田 寛 [3-4]立石 浩一 [5-6]岸本 秀樹 [7-8]宮本 陽一

[E-1]

日本語数量構文の統語構造

辰己 雄太

日本語の数量構文には，格助詞を伴った名詞句に数量表現が後続するタイプ（e.g. 本を三冊），数量表現が助詞の「の」を伴って名詞句に先行するタイプ（e.g. 三冊の本を），名詞句の直後に数量表現が現れるタイプ（e.g. 本三冊を）の三つのタイプが存在する。このような性質を持つ日本語数量構文の統語構造に関して，先行研究では大きく分けて二つの立場が採用されてきた。一つは上記の三つのタイプを統語操作によって関連づける分析であり（Watanabe 2006），もう一つは，上記の三つのタイプのうち，そのいくつかについては独立した統語構造を仮定する分析である（Ochi 2012）。本発表では解釈の違いや移動操作に関する例文を用いてそれぞれの立場を検証し, 後者の立場を支持した上で, Chomsky (2013) の Labeling Algorithm に関する議論をもとに，日本語の数量構文について新たな統語構造を提案する。

[E-2]

抜取りを認可する副詞節の統語分析――通言語的観点から――

吉村 理一

本発表では、英語の副詞節を考察の主対象にし、その内部からの抜取り操作に関する文法性の違いを通言語的な観点を交えて説明する。

Taylor (2007)は、文頭に生起する英語の条件節からの抜取りは容認される例が存在する一方で、文末に生起するものの中には、そのような例が存在しないことを指摘している。この文法性の違いを説明するため、①文頭に生じる条件節は話題化句（TopP）の指定部に基底生成され、それ故その位置からの抜取りを原則として許すこと、②文末に生起する条件節は VP に付加する構造を成し、付加詞の島を形成するため抜取りが禁止されることを主張する。

さらに、抜取りを認可する他の副詞節の考察と Etxepare(1999)により提示されているスペイン語の例との比較研究を通じて、本主張の妥当性を検証する。

[E-3]

多層 *v*P 仮説に基づく受動文の格吸収

石野 尚

英語の受動形態素は、Burzio(1981,1986)の一般化の一例で、主語の θ role を潜在化し、動詞が対格付与能力を失うため、目的語が TP,spec へ A 移動すると分析されてきた。一方、日本語には対応する他動詞構文のない間接受動文((α)目的語に対格が残留する受動文と、(β)自動詞を用いた受動文)が存在する。本研究は、*v*P 領域に aspect を担う機能範疇が存在するという仮定(Oka 2001,2004,Hiraiwa 2005,Travis 2010)に基づき、VP 上層に *v*(asp)P、その上層に *v**P を仮定し、【I】受動形態素が機能範疇(*v*/*v**)の何れに付加するかのヴァリエーションがあること、【II】V が機能範疇(*v*/*v**)の何れまで上がるかの言語間パラメター(Oka 2000)を用いて、日英受動文の派生メカニズムに統一的説明を与えることを試みる。経験的貢献としては、日本語母語英語学習者(JLsE)は英語で(α)を誤って容認するが、(β)が容認されないことは正しく習得している事実を報告し、JLsE の中間言語文法における受動文の統語メカニズムについても本提案が経験的に整合することを明らかにする。

[E-4]

名詞的モダリティ表現の解釈について

秋庭 大悟

法助動詞などの法表現が表す意味に関して、作用域の違いなどから、認識的解釈が CP、根源的解釈が vP の領域で解釈されるとの研究が数多くなされている。また、近年、法解釈がフェイズ単位でなされているという仮説が提唱されているが、CP と vP に加え名詞句もまたフェイズを形成するという議論に従えば、名詞句もまた法解釈を受ける一つの単位となる可能性がある。当発表では名詞的法表現の類型論的なデータを観察し、名詞句は n を主要部とする単層のフェイズ構造を成すという Fukui and Zushi（2008）の議論を踏まえ、項構造を作る名詞句(nP)内で法解釈を得るときには vP と同様に根源的解釈のみが許されることを論じる。一方、名詞的法表現が識的解釈を得るときにはモダリティ名詞を主要部とし CP を補部にとる複雑名詞句の形式をとることを論じる。これらを踏まえ、各フェイズにおける法解釈から、統語と意味のインターフイスにおける法表現の役割を考察する。

[E-5]

福岡方言における「バイ」「タイ」の統語的分布

木戸 康人

本稿では、Rizzi(1997)による CP のカートグラフィ研究を基にした Saito (2009)による日本語の終助詞のカートグラフィ研究を援用して、福岡方言(特に、福岡市周辺の筑肥方言)のデータから以下の二点を提案する。第一に、東京方言における「ダ」が肯定文であることをあらわすために、統語構造上、ForceP の主要部にあると述べる。第二に、福岡方言において、「ダ」は主節ではあらわれないことを示す。そのような経験的証拠から、(1)に示すように、福岡方言における「バイ」と「タイ」も「ダ」と同様に、ForceP の主要部を占めると提案する。

(1) a. 太郎は高校生(*だ)たい
b. これが博多通りもん(*だ)ばい

更に、本稿での提案は、(2)に示すように、村杉(2012)と Murasugi (2011;2012a,b)が提案する ForceP よりも上部に終助詞「ね」や「な」が主要部を占める Speech Act Phrase (SAP)があるとする仮説を支持するものである。

(2) a. 太郎は高校生たいな／ね
b. これが通りもんばいな／ね

[E-6]

日本語自由選択表現の分布と統語構造

小田 博宗

本発表ではまず、日本語自由選択表現の分布に関して、(i)英語等の言語では存在量化的読みの自由選択表現が単独で生起できるのに対し、日本語では特別な修飾語（「いいから」等）の共起が必要であること、(ii)本来自由選択表現が生起できない環境でも、この修飾語が使われることで存在量化読みとして容認可能になるものがあること、を示す。その上で、その修飾語が生起する環境を分離 CP 仮説(Rizzi(1997))に基づいて分析し、存在量化的読みに ForceP が関与していることを主張する。このことは、Butler(2003)が提案した法助動詞の分離 CP による構造分析によっても支持される。

これまで自由選択表現は主に意味論・語用論の分野で扱われてきた。これに対し本発表は、談話を盛り込む最新の統語論による（複合的な）研究の可能性を示唆するものである。

[E-7]

中国語における CQWC 構文について－非移動分析から

徐 佩伶

本稿は、中国語の CQWC 構文 （Conjoined Question Words Construction）の構造を考察するものである。従来では、CQWC 構文における *wh* 等位節は sideward 移動で分析されていたが（Zhang 2007）、sideward 移動分析は島の効果と優位性効果が中国語の CQWC に現れていないという事実が説明できない。また、中国語の CQWC は典型的なロシア語の CQWC 構文と同じように mono-clausal の構造を持つが、*wh* 等位節の解釈が異なっている。ロシア語の CQWC は single pair 読みが強く、D-link の解釈ができないのに対し、中国語の CQWC は pair-list 読みが許され、*wh* 疑問詞が D-link として解釈されなければならない。よって、本稿は中国語の CQWC が移動に関与しない分析を試み、*wh* 等位節は left-dislocated 位置に基底生成すると主張する。

[E-8]

非構成素等位接続に関する句構造文法に基づく分析の優位性を示す更なる証拠

矢田部 修一

筆者の論文 Comparison of the ellipsis-based theory of non-constituent coordination with its alternatives では、「礼状をお客様がた、そしてそのあと友人たちに年賀状を書いたんです。」のような文を用いて、非構成素等位接続に関しては範疇文法に基づく理論より句構造文法に基づく理論のほうが優れているということが主張されている。この文例の重要な特徴は、非最終等位項の末尾で省略されている「に書いた」のうち、「に」の部分が最終等位項の末尾に現れていない点である。本論文では、このような文において、非最終等位項の末尾で省略されているにもかかわらず最終等位項の末尾に現れない表現は、後置詞に限られるわけではないということをアンケート結果に基づいて示し、そのことが句構造文法に基づく理論の優位性を示す更なる証拠になると論じる。

【F 会場】司会：[1-2]沈 力 [3-4]プラシャント パルデシ [5-6]塚本 秀樹 [7-8]河内 一博

[F-1]

現代中国語の剰余否定―「差点」と「難免」を中心に

姚 碧玉

現代中国語では否定辞の生起に関わらず、否定の意味を表さない現象がある。本現象は「剰余否定」と呼ばれている。本発表では剰余否定を表す副詞「差点」と「难免」を取り上げ、剰余否定と語彙的意味の関係を考察する。

「差点 VP」について、先行研究では話者にとって望ましい事態か否かが事態の結果解釈に関与すると考える。本発表では新たに「差点没 VP」を考察対象に加え、語彙的な望ましさが指定されない VP について、発話者の期待が事態の結果解釈に影響すると結論づける。

一方、「难免」は「差点」と異なり、未実現の事態の可能性に関与する。データの検討の結果、「难免」は発話者の期待は事態の結果解釈に関与せず、VP の語彙的な望ましさのみが影響する。語彙的な望ましさをもつ VP は「难免不 VP」の構造に現れ、事態の結果として否定的意味をもつ。他方、語彙的に望ましくない、及び望ましさが指定されない VP はいずれも肯定的意味を表すと結論づけられる。

[F-2]

中国語とタイ語の移動表現の類型論タイプ

高橋 清子

中国語とタイ語は共に動詞連続言語であり、移動事象を表現するとき 3 種類の移動動詞（使役動詞／様態動詞、経路動詞、直示動詞）から成る単一の節が高い頻度で使われる。そのため、既存の移動事象の類型論では中国語やタイ語などの動詞連続言語は一つの言語タイプとして一様に扱われてきた。

本発表では、第一に、先行研究で示された中国語、タイ語の移動表現についての一般化を、両語を対照する観点から再考し、両語の移動表現には大きな違いがあることを指摘する。つまり、移動事象表現の節構成素（様態動詞や経路動詞など）間の統合度（統語スロットの固定化、経路動詞の文法化）が中国語では高く、タイ語では低いこと。また、移動事象の意味構成素タイプ（移動の様態や経路など）の多様性が中国語では低く、タイ語では高いこと。第二に、そのような違いを根拠とし、両語で表される移動事象はそれぞれ異なる類型論タイプに分類されるべきことを主張する。

[F-3]

シンハラ語における授受補助動詞と結び付く前項動詞について

デヒピティヤ スランジ ディルーシャ

本研究はシンハラ語における授受補助動詞と結び付く動詞の意味的特徴を明らかにすることである。まず、日本語能力試験の語彙リストから抽出した動詞（計 368）をシンハラ語に訳し、授受補助動詞 と共起できる動詞に「○」、共起できない動詞に「×」、を付けた。そして、授受補助動詞と結び付くか否かで動詞をそれぞれ表にまとめ、自動詞、他動詞に分類し考察を行った。さらに、特徴が見られた他動詞を寺村（1982）の動詞分類を参考にし、下位分類した。その結果、授受補助動詞と共起できない、あるいは、特定の授受補助動詞とのみ共起できる動詞のほうが多いということが明らかとなった。特に他動詞の中で授受補助動詞と共起できない動詞を下位分類した結果、主に感情・感覚の動きを示す動詞は授受補助動詞と共起できないということが明らかとなった。総じて、授受補助動詞と共起できるか否かには動詞による意味的特徴も形式的特徴も関わっていると言えよう。

[F-4]

オリヤ語における二重目的格制約

山部 順治

本発表は、オリヤ語において、目的格の形態-ku が連続する二つの名詞句に付くこと（-ku の連続出現）を禁止する制約（二重目的格制約）の働き方を記録、説明する。

比較的基本的な文では、-ku の連続出現が可能だ：同制約は働かない。例えば、二重目的語構文の単文では、-ku が対象名詞句と受け手名詞句に付く。ところが、それらの文がある一連の構文環境に埋め込まれた場合は、-ku の連続出現が不適格になる：同制約が効く。

事実を次のように説明する。

(i) 対象名詞句を格表示する規則として（ア）（イ）が並存する。

（ア） 文全体を点検、
状況〈人が対象に働きかける〉を表すなら、対象に-ku を付ける。

（イ） 対象名詞句だけを点検、

素性「対格」があれば、-ku を付ける。

(ii)　諸規則間に適用優先順位がある。優位順に、

（ア）＞ 二重目的格制約 ＞ （イ）

規則（ア）が（イ）に加えて存在するのは形式的に冗漫だ。しかし、両規則とも存在に認知的な動機付けがある。

[F-5]

韓国語の neunde と日本語のケドについて

池 玟京

韓国語の接続表現 neunde と日本語のケドは対応するとされてきたが，両形式は複数の意味関係を接続するためその対応関係が明確ではない。本発表では両形式の用例分析に基づいて類似点と相違点を考察し，次の三点を提案する。第一に，neunde とケドは(1)条件関係の有無，(2)条件命題との一致，(3)従属/対等，(4)時間的連続性，(5)前件の必要性で六つと五つのケースに分けられる。第二に，前後件の命題内容が順接のケースを「＋」，逆接を「−」，条件関係がないものを「０」とすると，neunde は「−」↔「＋」に股がるが，ケドは「−」↔「０」とより狭い領域に止まるので，意味論のレベルでは一致しない。最後に、両形式は決まった意味関係で接続を行うのではなく，聞き手に前後件の命題内容の解釈と関連づけを指示する手続き的機能をする。これは neunde とケドの接続領域が広い原因であり、語用論のレベルでは非常に類似性が高いと考えられる。

[F-6]

韓国語の〈連体修飾節＋名詞〉構造における語形成の位置づけ
―日本語との比較―

丁 仁京

本発表では，韓国語の〈連体修飾節＋名詞〉構造における語形成と，日本語の連用形における語形成との比較考察を行う。韓国語の〈連体修飾節＋名詞〉構造の中には，①日本語の「動詞連用形＋接尾辞」と同じく，実質的に名詞一語相当の総称的表現を作るものと，②「連体修飾節＋主名詞＝名詞句」という構造を持ち，連体節が文字通り，名詞を修飾し，主名詞が表すものの分類・限定を表す節を構成するものがある。そのうち，①の場合は，［連体形＋geos／gos］$_N$のように，‘geos（もの）’‘gos（ところ）’が主名詞というよりは名詞化辞に近い機能を持ち，動詞-l 連体形，形容詞-n 連体形も，分類・限定というよりは内容補充的な機能を持ち，形容詞は「属性」を，動詞は「目的・用途」を表す。このように，韓国語の〈連体修飾節＋名詞〉構造は，語レベルと節レベルの両方の性質を持つものがある。

[F-7]

モンゴル語のөnөについて
―日本語のアノとの対照―

巴雅尔都楞

本発表は、日本語とモンゴル語の指示詞の体系の対照研究、特に日本語のア系指示詞に対応するモンゴル語の形式について取り扱う。

そこで、日本語の指示詞はコ・ソ・アの三系列を成しているのに対し、モンゴル語は e-系と te-系の二系列である。大まかにいうと、モンゴル語の e-系は日本語のコ系に対応し、モンゴル語の te-系は日本語のソ系とア系に対応する。しかし、日本語ではア系列で指し示せるが、モンゴル語の te-系には対応する表現がない場合がある。そのとき、日本語のア系に対応するのはモンゴル語の өnөである。

モンゴル語の өnөと、日本語のアノの対照を通じて、個々の言語内部の指示詞の体系を見ているだけでは分からないことが対照研究を通じて明らかになることがあること、指示詞の周辺の表現も含めて指示詞の機能を見て行くことが指示詞研究をより豊かにする可能性を持っていることを示したい。

[F-8]

動作主が不特定の人為的事態の表現―日本語の受動構文とロシア語の不定人称文―

副島 健作

話し手にとって動作主が不明か,あるいは大事ではない人為的事態を表す場合，日本語では以下の例文(1)のように動作主非焦点化の受動構文が用いられるが，ロシア語の場合は(2)のように主語がなく，動詞が 3 人称複数の能動文である「不定人称文」が好んで用いられる。

(1)　コンサートのチケットはここで売られている

(2)　Здесь *продают* билеты на концерты

（ここでコンサートのチケットを売っている（直訳））

以上の点について本発表では，日本語からロシア語（またはその逆）に翻訳されたパラレルコーパスから収集したデータを用いて分析する。まず構文の分布状況から，日本語では受動構文，ロシア語では不定人称文やその他の能動構文が使用されるのが自然であることを示す。そして，各データを分析し，両言語の相違が「事態の捉え方の違い」すなわち参加者の視点から主観的に描写するか否か，に由来することを主張する。

【G 会場】 司会：[1-2]藤家 洋昭　[3-4]柿木 重宜　[5-6]福嶌 教隆　[7-8]米田 信子

[G-1]

トルコ語における再帰代名詞の解釈に関する一考察

カフラマン バルシュ・オズベッキ アイドゥン

トルコ語には *kendi* と *kendisi* という二つの再帰代名詞が存在する。先行研究ではこれらの再帰代名詞とその先行詞の間の束縛関係に関して異なる主張が行われている。しかし、これらの主張は少数の例文、または研究者の内省的直観によって導かれたものであり、実際に一般のトルコ語母語話者による再帰代名詞の解釈を反映しているものではない。そこで、本研究ではトルコ語母語話者による再帰代名詞の解釈について実験的検討を行い、従来の言語学的分析を裏付けるために二つの真偽値判断課題を行った。その結果、トルコ語母語話者が *kendi* の先行詞として埋め込み節の主語と主節の主語をほぼ同じ割合で選んだのに対して、*kendisi* の先行詞としては圧倒的に主節の主語を選んだことがわかった。これは、先行研究とは異なって、トルコ語では埋め込み節の主語も主節の主語も *kendi* の先行詞として解釈され得るのに対して、*kendisi* の先行詞としては主節の主語が解釈され易いことを示唆している。

[G-2]

現代ウイグル語の分詞について

新田 志穂

本発表では、現代ウイグル語における分詞が統語的・形態的に高い独立性を持つことを主張する。現代ウイグル語の分詞は連体節末・名詞節末・主節末に用いることができる。本発表で主張する現代ウイグル語の分詞の独立性の高さとは次の 2 点から主張できる。(1)現代ウイグル語ではいわゆる定動詞と主語との一致は義務的である。しかし、主節述語が分詞の場合には一致は任意となる。なお、現代ウイグル語と同じくチュルク諸語に属するトルコ語においても分詞が主節末に用いられるが、分詞への一致標示は義務的になされる。(2)分詞が名詞節末に用いられた場合、-l*IK* という単純語に付加する形式を付加できる。-l*IK* は名詞や形容詞にも付加される派生接辞であり、動詞語幹に直接付加することはできない。単純語に付加される形式が分詞にも付加できるという点で、分詞そのものが語と同等の資格を持っているといえる。

[G-3]

モンゴル語の名詞・形容詞・副詞の区分

梅谷 博之

モンゴル語の名詞と形容詞と副詞は，一部共通する形態的･統語的特徴を有している。このことから，三者を互いに区別することは難しいとする先行研究や，三者を下位範疇とする上位範疇（例えば「広義の名詞」）を設定する先行研究がある。その一方で，三者を独立した品詞として認めるものもあり，多様な分類が提示されている。

一般に，ある複数の範疇が，互いに独立したものなのか，それとも，より上位の範疇に属する下位範疇の関係にあるのかを知るのは容易ではなく，詳細な検討を要する。これはモンゴル語の名詞，形容詞，副詞の区分についても言える。本発表では，研究の基礎を築くことを目的に，名詞，形容詞，副詞とし

て分類されてきた語が有する特徴・機能を整理することからはじめる。そして，整理した結果を元に，どのような品詞分類がありうるかを提示する。さらに，今後，三者の区分について検討する際に念頭に置く必要がある事柄を述べる。

[G-4]

保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形－その区別と逆転－

佐藤 暢治

保安語積石山方言は一人称複数に包括形 mange 系と除外形 buda 系の区別を持つが、未解明の課題が二つある。一つ目は、包括形と除外形の区別に関する課題である。先行研究を再検討すると、そこには典型的な区別に加え、「われわれ意識」を持つ恒常的な集団を表す場合、公的な集団であればあるほど、包括形が聞き手を含むことなく使われる傾向にあることが明らかになった。二つ目は史的な課題である。包括形 mange 系と除外形 buda 系は各々モンゴル祖語における除外形*ba 系と包括形*bida 系を継承し、通時的に包括形と除外形が逆転している。保安語積石山方言に起きた逆転のシナリオとして、現時点では、典型的な包括形と除外形が各々土族語互助方言のような区別（「聞き手を話し手側に含むこともあれば含まないこともある一時的集団」と「聞き手とは無関係に、話し手がわれわれ意識のもと属する恒常的集団」）を経て、現在の区別へという過程が最も想定できる。

[G-5]

バスク語レクンベリ方言における自動詞分裂の意味的・形式的動機

石塚 政行

バスク語は、結合価に基づく能格体系から、意味によって自動詞主語の格を使い分ける分裂 S 体系に変化しつつある。本発表の第一の目的は、その変化の途上にあるとされる地域のレクンベリ方言のデータを元に、その自動詞分裂の意味的・形式的動機を指摘することである。意味的には、動詞の限界性 (telicity) が重要な動機となっている。また、借用語の場合には「借用もとのフランス語やスペイン語の動詞が代名動詞かどうか」という形式的な動機が働いている。本発表の第二の目的は、主語の移動とその様態を表す自動詞（移動様態動詞）の限界性に関する規則を主張することである。移動様態動詞は、様態に焦点を当てた非限界的な用法と、移動に焦点を当てた限界的な用法とで格が使い分けられる。音配列的に新奇な借用語であることが明らかな移動様態動詞にもこの使い分けが見られることから、移動様態動詞の限界性は規則的に機能していると考えられる。

[G-6]

バスク語アスペイティア方言の〈ABS - V - AUX〉の 構造と再帰行為・相互行為

吉田 浩美

バスク語アスペイティア方言では，いわゆる他動詞（行為者として能格 NP を，対象として絶対格 NP をとり，それらに呼応する助動詞と共起する動詞）を用いて再帰行為を表す場合は，①対象として「～自身」を表す絶対格 NP をとる能格構文，同じく相互の行為は，②対象として「互い」を表す絶対格 NP をとる能格構文で表し得るが，ほかに，両方とも，③〈行為者を表す絶対格 NP＋動詞＋絶対格のみに呼応する助動詞〉の構造でも表すことができる．しかし，意味的に相互や再帰を表しうるどんな他動詞でもこれらの構造に同じように現れるわけではない．すなわち，①／②がもっとも自然となる動詞，③がもっとも自然となる動詞に分かれる．また，再帰か相互かによっても分布に違いが見られる．世代による揺れも観察される．本発表では，どんな動詞がどの構造にもっとも自然に現れて再帰や相互の行為を表すかを明らかにし，世代間の相違にも言及する．

[G-7]

タガログ語の動詞接辞 ma- の多義性: 自発、意図成就、可能、受身

長屋 尚典

タガログ語には ma-という接辞がいくつか存在する。本発表では、このうち、非行為者焦点他動詞に規則的につく ma-について統語論的・意味論的分析を行う。本発表の主な発見・分析は以下の通りである。第一に、このタイプの ma-動詞は、自発、意図成就、可能、そして受身の 4 つの用法を持つ。自発

は「行為者の意図にかかわらず行為が実現すること」、意図成就は「行為者の意図通りに行為が実現すること」、可能は「行為者が意図した行為が実現する能力や状況が存在すること」を表現する。これらの ma-動詞において行為者項が削除されたのが受身である。第二に、以上で記述した ma-動詞の用法には、他動詞的事態の成立局面のみをプロファイルし、行為者の意志決定行為は後景化するという共通点がある (cf. DeLancey 1985)。第三に、無標の非行為者焦点動詞は、他動詞的事態の成立のみならず行為者の意志決定行為までもプロファイルする点で、ma-動詞と対立する。

[G-8]

ジンポー語方言のサブグルーピングに向けて

倉部 慶太

本稿の目的は、現時点で利用可能な複数のジンポー語方言のデータを利用し、共通の音韻革新を根拠として、これら方言のサブグルーピングを行うことである。そして、ジンポー祖語は最も初期に、*ts- > c- および preglottalized sonorants の消失という音変化を被った北部方言とこの変化を被らなかった南部方言に分岐したと推定する。続いて、北部方言は、*ɕ- > s-、*Cy- > C- (before *-i, *-e)、*-a, *-e, *-o > -a:, -e:, -o: の音変化を被ったグループと*r- > l-、*Cr- > C-、*-o > -ɯ、*-oi > -ɯi の音変化を被ったグループに分岐したと推定する。また、南部方言は、*w- > y- (before *-i, *-e) の音変化を被ったグループとこの音変化を被らなかったグループに分岐したと推定する。

【H 会場】司会：[1-2]三間 英樹 [3-4]神山 孝夫 [5-6]岩井 康雄 [7-8]本間 猛

[H-1]

規則適用としての連濁：事象関連電位計測実験の結果から

小林 由紀・杉岡 洋子・伊藤 たかね

本発表では事象関連電位（ERP)を指標として，規則の適用という計算処理が連濁に関わることを示唆する実験結果を報告する。日本語の複合語の右側要素は連濁を起こすのが一般的であるが，それを阻止する要因として右側要素に含まれる濁音（ライマンの法則），特定の語（e.g.「姫」）が連濁しにくい語彙的要因などが知られている。これらを利用して，連濁しない環境で連濁する違反(語彙条件とライマン条件)と逆に連濁する環境で連濁しない違反（非適用条件）の刺激を作成した。語彙条件，ライマン条件，非適用条件の 3 タイプの複合語を含む刺激文を 25 名の日本語母語話者が読む際の ERP 反応を計測したところ，語彙条件では LAN+P600，ライマン条件では P600，非適用条件では N400 が観察された。語彙条件で観察された LAN は連濁規則の過剰適用によって惹起されたものと見なすことができ，連濁が規則による計算処理であると考えられる。

[H-2]

幼児期の連濁獲得を規定する諸要因の検討－有標性の原理と語構造の影響をめぐって

杉本 貴代

幼児の複合名詞産出における連濁の獲得を規定する語彙特性および要因について横断的実験により検討した。具体的には、① 語頭子音ごとに獲得されているか、② もし子音ベースの獲得であるならば、言語普遍的な子音の有標性の序列に従うか、③ 幼児 3 学年において、語構造（モーラ数等）による認知的負荷の影響はあるか、という 3 点に絞って検証した。実験では、複合名詞主要部の語頭子音とモーラ数を統制し、幼児 3 学年を対象に複合名詞産出課題を実施した。その結果、連濁は子音ベースの獲得ではなく、子音の有標性といった音声的特性（要因）に規定されないことが明らかになった。一方、語構造の影響が見いだされ、主要部の語構造がより単純であるほど連濁生起しやすいことが分かり、連濁獲得に韻律的要因と統語的要因が相互に関与している可能性が示唆された。

[H-3]

ロシア語の硬口蓋化にみる子音・母音間の相互作用

渡部 直也

ロシア語にみられる前舌母音の直前での子音の硬口蓋化は、一次的調音の変化（軟口蓋子音の硬口蓋歯茎音化）と二次的調音の付加とに大別される。後者については、子音・母音間での調音同化、すなわち素性の一致として分析されている。前者については、子音・母音双方に対して同一の素性を仮定するかどうかで意見が分かれるが、本発表では、前舌母音が歯茎音や硬口蓋音と同様に[coronal]の素性を有し、それが子音に拡張することを主張する。これにより、硬口蓋化を引き起こす環境が失われ、音韻論的に“不透明な”場合でも、制約の再検討によって共時的な分析が可能となることを提示する。また、二次的調音としての硬口蓋化は[-back]あるいは[coronal]によって表示されると考えられるが、どちらが妥当であるか検証する。

[H-4]

対立が“不完全に”中和した語の音声知覚: ロシア語の語末無声化の事例

松井 真雪

ロシア語では、語末位置における有声阻害音の無声化に伴って有声性の対立が中和するという記述がなされてきた。しかしその一方で、中和すると予測されている音声環境において、対立を反映する様な微細な音声的差異が認められる状況—不完全中和 (incomplete neutralization)—が観察されており、音声学と音韻論のインターフェイス研究にとって重要でありながらも未解決の問題が数多く残されている。本研究は、ロシア語母語話者を対象とした音声同定実験によって、不完全中和の音声知覚に関するいくつかの問題を検討した。聞き手の応答の種類を分析した結果、聞き手は、中和することが想定される環境において摩擦音の有声性をある程度聞き分けられることが示唆された。また興味深いことに、語末位置の破裂音と摩擦音の有声性は同等に中和するとこれまで報告されていたが、今回の結果は、両者の知覚のされ方が一様でないことを示唆した。

[H-5]

マレー語におけるフットの正体：3 つの音韻的証拠から

橋本 大樹

先行研究では強勢や最大語条件といった証拠から (i) 音節量に左右されない (ii) 右端から構築する (iii) 2 音節から成る (iv) 強弱フット の存在が指摘されている。本研究では、この 4 つの性質を持つフットの存在を裏付けるために、新たに 3 種類の独立した根拠を提示することを目標としている。具体的には (a) 母音の生起制限 (b) 最小語条件 (c) 愛称語形成 の 3 つの音韻的・形態的証拠を提示することで、先行研究で指摘されたフットの存在を裏付ける。(a) 母音の生起制限は (i, iii, iv) のフットの性質を裏付け、(b) 最小語条件は (i, iii) のフットの性質を裏付け、(c) 愛称語形成は (i, ii, iii) のフットの性質を裏付ける。

[H-6]

後部要素が二字漢語の複合語アクセントについて

田端 敏幸

日本語の複合名詞アクセントは、一般に、「Ａ＋Ｂ」における後部要素「Ｂ」のアクセント型が保持される（「ネクタイ＋ピン」のように後部要素が単音節の場合はその限りではない。このような場合には、末尾アクセントを避け、境界の左隣にアクセントを置く）。後部要素が漢語の場合にもこの原則は適用される。ただし、複合語の後部要素が二字漢語の場合には、例えば、「耳学問」(/mimi＋gaku’mon/ ～ /mimi+ga’kumon/ のようなゆれが発生する。このようなアクセントン型の「ゆれ」が二字漢語に生じる原因を、漢字音がもつ「長さ制約（二字漢語は２～４モーラの範囲に限定）」と「挿入母音の存在」に求める。結論として、「耳学問」/mimi+ga’k<u>mon/ のような形式は、「挿入母音にはアクセントをおかない」という音韻制約が誘発する音韻現象として捉えるべきである、という主張を展開する。

[H-7]

三重県尾鷲市方言の単純動詞アクセントと‘第三の式’

平田 秀

本発表では三重県尾鷲市方言のアクセントにα・β・γの3式の対立があることを主張する。発表者による名詞アクセントの調査結果では、β式の語は複合名詞に語例が集中しており、β式は形態的に有標な語を示す式として解釈されうるものであった。同方言の2〜4拍の単純動詞アクセントの調査結果は、以下の(1)〜(4)の通りである。

(1) 2拍動詞は、一段動詞・五段動詞ともに○[○型(α式無核型)・[○○型(γ式無核型)で出る。
(2) 3拍動詞は、一段動詞・五段動詞ともに○○[○型(α式無核型)・[○]○○型(α式1型)で出る。
(3) 4拍一段動詞は、○[○○]○型(β式3型)で出る。
(4) 4拍五段動詞は、○○○[○型(α式無核型)・○[○○]○型(β式3型)で出る。

上記の通り、単純動詞においてはβ式の語が多数得られた。このことは、同方言が純粋な音韻的属性として3式の対立を持つことを支持すると言える。

[H-8]

波崎方言における有声重子音回避

佐々木 冠

茨城県神栖市波崎で話されている方言では、コピュラ/=da/の先頭の子音が無声化することがある。この無声化は、標準語のノダ文に対応する構文の述部で生じる。この方言のノダ文の述部は述語の終止形とコピュラで構成される。そして、述語が/...ru/で終わる場合、/ru/が促音化しコピュラの先頭の子音とともに重子音を形成する。ただし、重子音[dd]ではなく無声化して[tt]になる。この無声化は、有標な喉頭素性の指定を回避した結果と考えられる。

動詞のテ形および過去形では、撥音便やイ音便によって有声重子音が回避される。有声重子音回避の多様性は出力間忠実性制約（Benua 1997）によって説明できる。/-te/や/-ta/に先行する要素と異なりコピュラに先行する要素は独立して存在できる。コピュラに先行する部分で撥音便やイ音便が生じないのは、鼻音性と調音点素性に関する出力間制約の高い位置づけによる。

<< ワークショップ Workshops >>（2011年11月24日）

[W-1]

『語彙意味論の潮流：様態・結果の相補分布仮説とその先に見える世界』

企画：江口 清子　　司会：由本 陽子　　コメンテーター：岸本 秀樹

Talmyの移動事象に関する認知意味論的研究 (Talmy 1985, 1991, 2000) の一つの解釈として、動詞の意味概念における「様態」と「結果」の相補性（以下、「様態・結果の相補分布仮説」と呼ぶ）について数多くの議論がなされてきた (Levin & Rappaport Hovav 2008, Rappaport Hovav & Levin 2010, Beavers and Koontz-Garboden 2012, Mateu 2012 など)。この単一の動詞意味概念に、様態・結果の両方が同時に含まれることはないとする仮説は、近年の動詞の語彙意味概念研究において大きな影響力がある。しかしながら、先行する研究では、英語をデータとするものが中心であり、様々な言語での論証は今後の展開が待たれる。

そこで本ワークショップでは、この様態・結果の相補分布仮説に対して、異なる枠組みで研究を進める3名の研究者の視点から、改めてその妥当性を問い直し、今後の研究の方向性を示すことを目標とする。

[W-1-1]

「手段」を表す動詞における様態・結果の解釈

境 倫代

動詞語根は「様態」か「結果」のどちらか一方のみを語彙化し、両方を語彙化することはないという様態・結果相補分布仮説 (Rapapport Hovav and Levin 2010 など) に対して、両方を同時に語彙化する第3の動詞グループが存在するという主張がある (Beavers and Koontz-Garboden 2012)。本発表では、「様態・結果」という単純な相補分類では捉えきれない言語事実があることを提示し、さらに詳細な分類が必要であると主張する。様態・結果の相補分布仮説の反例として挙げられている動詞には、手段を表す名詞由来動詞が多く見られる。この事実に基づき、本発表では、「様態」ではなく「手段」という意味要素

を仮定することで、様態・結果の相補分布仮説の反例とはならないと議論する。また、先行研究で主張されている「結果」の解釈の派生に関して、名詞のクオリア構造に基づく説明を試みる (cf. Pustejovsky 1995)。

[W-1-2]

見せかけの結果から見る様態・結果相補分布仮説

臼杵 岳

本発表では、様態・結果の相補分布仮説に対して、「見せかけの結果構文」の考察から、様態・結果の二分類では不十分であること指摘し、より詳細な「様態・手段・産物・結果」という分類が必要であると主張する。具体的には、弱い結果構文（拓哉は壁を｛白く/白に｝塗った。）において、「白く」を伴う例は見せかけの結果構文であることを示し、語彙意味論に基づく派生を提案する。また、「見せかけの結果構文」にはいくつかの種類があることを形容詞遊離に基づき示す。最後に、様態・結果の相補分布の観点から、特異なオノマトペを伴う結果構文を再考する。

[W-1-3]

イベント統合の類型から見る様態・結果の相補分布

江口 清子

ハンガリー語において動詞語根以外で「結果」を表現する方法には、動詞接頭辞の付加といわゆる結果述語の付加という二通りの操作が考えられる。この事実は Talmy の提唱するイベント統合の類型 (Talmy 1991) の予測するものであるが、同じ類型に分類される英語に比べて、結果述語の付加という操作の許容度は極端に低く、影山 (2006) では、英語と異なり、LCS あるいはクオリアの目的役割で明確な変化結果が指定される場合に限られることが指摘されている。

本発表では、移動表現、壁塗り交替現象を平行して考察し、なぜこのような差異が産まれるのかを明らかにする。これによって、様態・結果の相補分布仮説の意義について再考し、言語類型を連続体として捉え直すことを提案する。

[W-2]

『レキシコンと CP システムのはざま』

企画：長谷部 郁子　司会：長谷部 郁子

本ワークショップの目的は、生成統語理論において、語用論的な談話機能を担う機能範疇であるとされている CP システムについて更なる精緻化を行うことである。Rizzi（1997）以来、CP の精緻化は様々なかたちでなされてきたが、長谷川編（2007）ではさらに、多様な主文現象（主題化や焦点化など）や心的態度を表す要素（日本語の心的態度を表す助動詞や、話者指向の心的態度を表す動詞など）と CP との関わりが詳細に論じられている。こうした議論の流れをふまえ、本ワークショップでは、特に、これまであまり光が当てられてこなかった CP システムと語彙範疇（V、A、N など）の関連性を取り上げ、省略や時制の一致、人称制限といった現象の観察を通して、これらの語彙範疇に基底生成される要素が持つ項構造の情報や形態的・意味的特性が具体的にどのように CP 内の機能範疇と関わるのか分析することにより、レキシコンの情報が談話機能と関わるメカニズムを明らかにしてゆく。（400 字）

[W-2-1]

語彙的モダリティ表現としての「V＋-てくる」表現

長谷部 郁子

本発表で扱うのは、「彼は（私に）文句を言ってきた」のような日本語の「V＋-てくる」表現である。長谷川（2007）は、「V＋-てくれる」表現に現れる「くれる」の間接目的語の省略は目的語が 1 人称の場合のみに限られる事実を指摘しているが、「V＋-てくる」の「くる」の間接目的語の省略にも同じ事実が見られる。本発表ではこれらの表現を「語彙的モダリティ表現」と呼び、CP システムの主要部と関わる要素は省略の対象となりうるという長谷川（2007）の提案に基づき、CP システム内の心的態度を表す機能範疇 Modal が持つ素性[+ Modal]が「-てくる/-てくれる」が持つ[+ Modal]と照合した結果、これらの動詞の指定部に生起する間接目的語は 1 人称の場合のみ省略が許されるようになると主張する。

更に「V＋-ていく」表現との比較も行い、形容詞や名詞などの「語彙的モダリティ表現」にも触れ、「主観性」（澤田（1993））のような概念がどのように統語論と関連するのか論じる。

[W-2-2]

時制の一致の視点から考える CP とレキシコンの関係

本多 正敏

本発表では、英語と日本語における主節と埋込節が表す出来事時（Event time; ET）の同時性を、時制の一致（Sequence of Tenses; SOT）と時制解釈、及び述部のアスペクトの観点から考察し、発話時（Speech time; ST）・基準時（Reference time; RT）・ET が項構造の一部として統語構造に具現化すると仮定することで、上述の同時性が捉えられると主張する（cf. Stowell (2007)）。具体的には、CP が ST、TP が RT、V(v)P 領域が ET を反映すると仮定し、この構造における束縛関係に基づいて時制解釈関係が導かれると主張する。この提案により、日本語における時制形式と実際の解釈がずれるような事例（例：タ形が用いられているのにも関わらず、述部の状態性が発話時にも及ぶような「発見のタ」）とその埋め込みに関わる現象も捉えられることを示す。

[W-2-3]

日本語における「感覚文」と主要部移動

神谷 昇

本発表では「あー、寂しい」のような、話し手の感覚や感情を描写する「感覚文」の統語構造を中心に検討する。感覚文は、(i) 主語は 1 人称であり、それは通常、表出しない、(ii) 述語は主として心理述語と感覚述語が用いられる、(iii) 述語語尾はル形である、などの特徴を持つが（井上(2009)）、これらは CP 領域にある Force の特性と主要部移動により説明できることを論じる。具体的には、上田(2007)による日本語の真正モーダルの分析を感覚文の分析に援用し、Force は[+1st person]の素性を持ち、それを照合するために述語が Force に移動することを提案する。通常、主要部の（EPP）素性を満たすには、主要部が音韻的・形態的に具現化するか、その指定部に句が併合される必要があるが（Hasegawa (2005)）、「感覚文」では述語が Force へ移動することにより、その EPP 素性が満たされるため、主語は表出することはないと考えられる。また、本発表の分析は日本語における主要部移動（例えば Koizumi (1995)）を支持することにもなる。

[W-3]

Current Issues in Sign Language Studies

Organizer：Editorial Committee (Linguistic Society of Japan)
Workshop Moderator: Norie OKA　Commentator: Susan FISCHER

The study of sign languages has been emerging as an important research field of linguistics. Research has revealed that although there are differences in the modalities, one visual-gestural and the other aural-oral, they share universal features. We believe that it is an opportune moment to hold this workshop to introduce some of the research topics currently studied in sign language linguistics. These presentations will cover various topics studied by diverse research methodologies and theoretical frameworks. All presentations feature non-manual markers as an essential part of their research, although sign languages tend to be considered to be mainly articulated manually. These presentations will include examples of collaborative work by deaf and hearing researchers, which should be encouraged in sign language studies.

[W-3-1]

Commands in Turkish Sign Language (TID)

A. Sumru ÖZSOY, Meltem KELEPİR, Derya NUHBALAOĞLU, Emre HAKGÜDER

This presentation focuses on the properties of command constructions in Turkish Sign Language (TID). The nature and function of nonmanual markers as well as the manual signs in command constructions in TID are investigated to determine the prosodic, morphological and morphophonological properties of TID commands. Cross-linguistically, the verb signs in command constructions have been observed to be tenser and more abrupt than their counterparts in declarative constructions.　Morphologically some sign languages have been noted to exhibit agreement reduction in the marking of addressee-agreement in verbs. Among the properties commonly observed in command constructions of a number of sign languages is the manual sign ‘palm up’ occurring

utterance finally.　The paper provides a detailed linguistic description of the TID command construction.

[W-3-2]

On the structure of wh-final clauses in Japanese Sign Language

Asako UCHIBORI, Kazumi MATSUOKA

In JSL, as well as in many other sign languages, wh-final sentences are common. In contrast, in the majority of spoken languages, wh-phrases appear clause-initially unless they remain in-situ. Sign language wh-sentences, thus, raise interesting issues on the relation between linear properties and the structural properties of natural languages. We will point out that previous approaches to wh-finals in other sign languages, such as ASL, Libras, or LIS, cannot be applied to JSL wh-finals, and argue that JSL wh-signs can function as a wh-complementizer or a wh-operator, without any overt morphological changes. The JSL wh-sign in the clause-final positions is a wh-complementizer, while the wh-double constructions are derived by an optional leftward movement of a wh-sign as a wh-operator.

[W-3-3]

Perceptive Non-manual Markers in Japanese Sign Language

Yasuhiro ICHIDA, Takeshi NOGUCHI

One of the Non-manual markers (NMMs) in Japanese Sign Language has marked eye behavior (wide-open/squint/close). If these markers co-occur with body motion verbs, they will be changed into perception verbs or psychological change verbs; BREATH-IN changes to SMELL, CANNOT-MOVE changes to PUZZLED. These markers represent the “perception of some change in a mental domain”, and gain a specific meaning (discovery/remembrance/search/judgment) by combining them with one of four chin-positions systematically distinguished in JSL. Markers are independently used as a conjunctive form of inter-clause. If the markers co-occur with whole clauses, the clauses will be changed into a quotational clause, which describes a perceptual content in the monologue style. Furthermore, when such a quotational clause grammaticalizes, markers function as markers of evidentiality.

[W-3-4]

Expressing modality: A descriptive study of Japanese Sign Language

Hitomi AKAHORI, Uiko YANO, Kazumi MATSUOKA, Norie OKA

Different languages employ different verbal expressions to express varying degrees of commitment or belief in a proposition. Though modality has been actively explored in numerous studies of spoken languages, there have been very few systematic studies of modality in sign languages. In this study, basic descriptions of modality (expressed manually and non-manually) in Japanese Sign Language will be presented, many of which demonstrate different linguistic properties from similar expressions in spoken Japanese. Results of the data collected from a group of native signers will be provided to establish the variety of modal-related expressions in JSL, as well as how those expressions are associated with different degrees of probability assumed by the signer.

[W-4]

『標準語との接触による方言アクセントの変化』

企画：窪薗 晴夫　司会：窪薗 晴夫　コメンテーター：上野 善道

日本各地で伝統的な方言体系が失われつつあるが，その一方で，標準語との接触によってハイブリッドの方言体系が生み出されるこの時期は，言語変化のメカニズムを探る好機とも言える。本ワークショップでは，方言と標準語の二方言併用話者が増える中で，日本語の方言アクセント体系が変質してきている様を鹿児島方言，長崎方言，近畿方言の３つの方言について考察し，以下の３点に着目して，方言接触によるアクセント体系の変化メカニズムを探る。(i) 各方言におけるアクセント変化のどの部分が標準語の影響によるものか。二方言併用が増えることによって，方言アクセント体系のどの部分がどのように変容しているか。(ii) この変化は，方言アクセントの特性や体系についてどのような知見をもたらすか。(iii) 標準語の影響によるアクセント（体系）の変化は，方言間でどのような異同を見せるか。

[W-4-1]

鹿児島方言におけるアクセントの変化

窪薗 晴夫

鹿児島方言は長崎方言と同様に，２型アクセント体系（ピッチ下降を伴う A 型と下降を伴わない B 型）を有し，また複合語は前部要素のアクセント型を継承する（複合法則）。さらには，音調付与の基本単位がモーラではなく音節である。世代別のアクセント調査によると，若年層は中高年層と大きな違いを見せ，アクセント型の混同が著しい。また，伝統的な複合法則が働かなくなってきている。この変化を詳細に調べてみると，標準語でピッチ下降を伴う語は鹿児島方言で B 型→A 型の変化を遂げ，逆に標準語でピッチ下降を伴わない語は A 型→B 型の変化を見せていることがわかる。このように若年層話者は標準語のピッチ下降の有無だけを模倣し，他のアクセント特徴は伝統的な鹿児島方言の特徴を保持している。この変化によって伝統的な複合法則も変質し，若年層のアクセントでは後部要素によって複合語全体のアクセント型が決まってくるようになっている。

[W-4-2]

長崎方言におけるアクセントの変化

松浦 年男・佐藤 久美子

長崎方言は鹿児島方言と同じく２型アクセント体系を持つが， (A)ピッチ下降を伴う型（A 型）では最初から 2 モーラ目に高いピッチが固定される, (B)前部要素が 3 モーラ以上の複合語は複合法則に従わず B 型に中和する，(C)外来語では標準語において初頭 2 モーラにアクセントのある語は A 型に，その他の語は B 型になる傾向を示す，以上の３点において鹿児島方言とは異なる。
世代別のアクセント調査を行った結果，次のことが明らかになった。(1)若年層においては(A)の記述とは異なり，3 モーラ目以降に高いピッチが現れる。このパターンは特に複合語において多く見られ，下降の位置は語境界の直後が多い。(2)高年層とのアクセント型の一致度は中年層に比べ若年層は低く，一致していない語の多くは(C)と同じく標準語アクセントと対応する。(3)外来語に比べて和語，漢語では一致度が低い。また形容詞に比べ，和語名詞，動詞での一致度は低い。

[W-4-3]

大阪方言における外来語アクセントの変化

田中 真一

大阪方言は，語頭からアクセント核まで高く発音される高起式と，アクセントモーラ直前まで低ピッチの続く低起式の２つの式があり，この点において標準語とは大きく異なる。また，結合形において，前部要素の式が全体に継承される「式保存の法則」が知られている。式決定の手がかりを持たないように見える（単純）外来語に着目し，世代別のアクセント調査を行った結果，次の３点が明らかになった。(1)外来語アクセントの変化は核よりも式においてより顕著に見られ，話者の年齢が下がるにしたがって低起の割合が増加する。(2) 4 モーラ以下の語においては，核位置によって式が決定されやすく世代差が小さいのに対し，５モーラ以上の長い語において差が顕著になる。(3)語頭の音節構造が式決定に関与するように変化している。語頭音節と式との対応関係が標準語と一致することから，大阪方言における外来語式決定に標準語の方策が関与していることがわかる。

<<ポスター発表 Poster presentations >>（2013 年 11 月 24 日）

【ポスター会場 A】

[P-1]

中国人日本語学習者の「人」を表す接尾辞を含む複合語彙の習得に及ぼす諸要因

大和 祐子・玉岡 賀津雄・初 相娟

本研究では中国人日本語学習者を対象に，日本語の「人」を表す接尾辞を含む複合語彙を構成する複数の刺激特性および日本語習熟度のこれらの語彙習得への影響を，32 の刺激語を使って検討した。刺激特性として，(1) 中国語における同形語の有無，(2)「人」を表す接尾辞の種類(「人」・「者」・「員」・「家」),

(3)語基の難易の３つの変数を設定した。さらに，201 名の中国人日本語学習者に対して 16 問の読解テストを行い，得点で上・中・下に分け，学習者の特性変数を４つ目の変数とした。「人」を表す接尾辞の複合語彙の正誤を４つの変数で予測する決定木分析の結果，中国語に同形語があるかどうかが最も強く影響していた。そして，同形語がある場合には，語基の難易が最も正誤の判断に影響を与えていた。一方，中国語に同形語がない場合には，接尾辞の種類が影響していた。日本語学習者習熟度の違いは日本語の複合語彙の接尾辞を正しく選ぶ上では影響がなかった。

[P-2]

Asymmetrical phonological activation
when recognizing words in a second language

Kyoko HAYAKAWA, Rinus G. VERDONSCHOT, Katsuo TAMAOKA

Previous studies investigating Chinese-Japanese bilinguals showed that for words having Chinese counterparts (e.g. 握手, hereafter: S-Type) L2-Japanese phonological processing was weaker than for words which did not (e.g. 注文, hereafter N-type). In this study, using 32 Chinese-Japanese bilinguals (mean age studying Japanese: 6.0 years) an attempt was made to further corroborate these findings using a novel mora-monitoring task. The results showed faster RTs for S-types compared to N-types for Yes-responses and the opposite pattern for No-responses. Additionally, N-types showed no difference between Yes- and No-responses. Contrastingly, S-Types showed longer monitor times for No-responses. These results suggest that Chinese-Japanese bilinguals build up more robust phonological representations for N-types compared to S-types.

[P-3]

ウズベク語の動名詞 *-(i)sh* による連体修飾

日髙 晋介

本発表では、次の二点を明らかにする。すなわち、①非定形動詞による連体修飾構造は形動詞（形容詞的動詞）のみならず動名詞によっても可能である、②なおかつ動名詞による連体修飾構造は「外の関係」（寺村 1975）を示す傾向にある、という二点である。

従来のウズベク語の参照文法書（Kononov 1960, Bodlogrigeti 2003）では、非定形動詞による連体修飾構造として、形動詞＋主要部名詞という構造のみが記述されてきた。ところが、ウズベク語の新聞記事では、動名詞を用いた連体修飾構造も見られる。さらに、テキスト内ではその連体修飾構造は外の関係のみ表す（母語話者の内省によると、内の関係も表すことが可能である）。

上記に加えて、その連体修飾構造が Comrie(1998)が提示したチュルク諸語（トルコ語*-(y)An*, *-DIK* とカラチャイ・バルカル語*-GAn*）の連体修飾構造と異なっていることも示す。

【ポスター会場 B】

[P-4]

Cad é an dóigh ‘how’ in Irish

Dónall P. Ó Baoill, Hideki Maki

This paper investigates the chain properties of the manner adverbial wh-phrase *cad é an dóigh* ‘what the way = how’ in modern Ulster Irish (Irish, hereafter). Based on the newly found data, we will argue (i) that the data lend support to Lasnik and Saito’s (1992) claim that an adjunct wh-phrase only creates variables/traces at LF, (ii) that adjunct wh-phrases do not constitute a uniform category, but fall into two categories in Irish: the *how*-type and the *why*-type, (iii) that non-genuine argument operators (*how*, *why*, and the comparative operator) do not simply constitute a uniform category in Irish, and (iv) that Irish has two types of [+Q] COMPs (one found in English and another found in Chinese).

[P-5]

上昇調文末表現「～くない」の文法化と統語構造

團迫 雅彦

本発表は，(1)のような福岡市方言や熊本市方言で観察される上昇調文末表現「～くない」に着目し，その統語特性を明らかにすることを目的とする。

(1) あの部屋，寒かったくない？

この文は話し手と聞き手が部屋を出た後で，聞き手に部屋が寒かったことの確認や同意を求めるという状況で発せられたものである。したがって，「寒くなかった？」のように否定形を用いた否定疑問文に置き換えられる（平塚 2009）。しかし，形式的には形容詞「寒い」のタ形に「～くない」を接続させ，上昇調で発音される。

本発表では，この上昇調文末表現「～くない」は (i) 文法化され，一語で辞書に登録されており，(ii) 時制を含まず，(iii) 上田(2007)，Ueda (2009)の発話伝達モーダル（U-modal）には該当せず，遠藤(2010)で提案された「名詞的な焦点要素と整合する終助詞（nominal focus-compatible particle （NFP））」以外の終助詞，すなわち，「わ，ぜ，ぞ」といったタイプの終助詞に該当すると主張する。

[P-6]

連体修飾節におけるインドネシア語の di-受動態の統語的・語用論的特徴
－日本語との比較を通じて－

シルフィア ウィジャヤ・堀江 薫

本発表ではインドネシア語の di-受動態が連体修飾節で用いられる際に日本語の受動態にどの程度対応しているかを調査した。その結果、インドネシア語の小説における連体修飾節の di-受動態の三分の二以上が日本語訳で「能動態」に変換されていることが分かった。

この相違は、日本語の受動態には「迷惑」という特徴があり、また修飾節内の動作主は主題と同じである場合、主題の視点の一貫性を保つために能動態が選好される一方、連体修飾節内での di-受動態はそのような特徴を持っておらず、「主要部名詞が修飾節内で目的語である」場合に限定されているということに起因する。

更に、di-受動態を用いる連体修飾節は、主要部名詞を修飾するのみならず、その主名詞を次の出来事の主題にすることによって主節の出来事の記述の継続が可能である。一方、日本語の受動態にはそのような機能がないため、連体修飾節でなく独立文として訳される傾向があるという相違も見られた。

【ポスター会場 C】

[P-7]

日本語の遊離数量詞と限定解釈

平川 八尋

日本語では、主語から数量詞が遊離した「学生は3人本を買った」は適格文となるが、動詞句内に遊離した「＊学生は本を3人買った」は適格文にはならない。Miyagawa (1989)が提唱する数量詞遊離の成立条件である「相互 C 統御」違反の例である。しかし、高見(1998)では「相互 C 統御」条件では説明できない例として目的語を「本」から指示代名詞「それ」にした「学生がそれを 3 人買った」をあげている。本発表では表面的には関係なく見える目的語の指示代名詞化と数量詞遊離との関係を考察する。特に、指示代名詞と事象（イベント）の「リスト」化、及び「VP 数量詞」の「分配読み」（cf. Ishii 1998）とも関連づけ検討する。

[P-8]

ベトナム語の反事実条件表現における接続詞 *nếu* と *giá* の特徴について

DANG THI HONG NGOC

ベトナム語の条件構文では様々な接続詞が生起しうる。そのうち、反事実条件表現では、一般に *nếu* と *giá* が用いられる場合が多い。反事実条件表現について、先行研究は「過去・現在の事態と対立する事態」の意味を中心に取り扱っている。しかし、本発表では「未来において仮定される事態が事実となる可能性が低い、あるいは全くない」場合も含める。本発表では、この定義のもとで、反事実条件表現

における接続詞 *nếu* と *giá* の特徴及び使い分けについて議論した。
　分析の結果、*giá* は発話者にとって望ましくない事態（結果事態に対する評価が低い時）に対してのみ生起するが、*nếu* にはその制限がなく、反事実条件表現であれば広く分布する。LêThị Minh Hằng (2005) では発話者の安堵なニュアンスが *nếu* と *giá* の使い分けに関与すると考えられているが、本発表では、当該のニュアンスは望ましい結果事態の含意と捉えられるので、両接続詞の区別の基準にはならないと結論づける。

[P-9]

英語に「役割語」は存在するのか？

山木戸 浩子

　「役割語」は，金水(2003)以降，日本語を中心に研究が進められつつあるが，本発表では，英語にも役割語が存在することを示す(cf. 山口(2007))．データとして，米国のテレビドラマ『クローザー』に登場するアジア系・ロシア系移民とアフリカ系アメリカ人が話す非標準英語の台詞を取り上げ，文法の面から分析する．
　まず，中国系・日系・ロシア系移民の英語の台詞では，**共通して**主語，屈折接辞，冠詞，be 動詞，to 不定詞等の脱落が頻繁に起こる．また，テンスが過去でも動詞は原形が使われる．中国語・日本語・ロシア語の文法は大きく異なることから，これは単に母語の干渉によるものではないと言える．
　一方，黒人英語の台詞には，二重／多重否定，ain’t の使用，ゼロコピュラ等，AAVE の特徴的な文法の**一部のみ**が顕著に現れる．つまり，標準英語の文法の多くが保たれつつ，AAVE の代表的な文法のみが効果的に使われ，アフリカ系アメリカ人という民族と結びつけられているのである．

[P-10]

「シダイ」の節構造：時制・動名詞・格

田川 拓海

　「仕事が終わり次第、家に帰ります」のような、時間の前後関係を表す時間節を形成する「シダイ（次第）」について 1) 時制と活用形、2) 動名詞の生起、の二つの観点を中心に考察し、その性質が形態統語論的研究における新しいデータを提供できることを示す。
シダイ節には時間副詞および主節と異なるガ格句の生起が可能である。この二つの現象はシダイ節が連用形節を取るにもかかわらず統語的には時制句（TP）を含んでいる可能性を示唆しており、連用形と時制を結びつけて分析する先行研究にとって問題となる。また、シダイ節では「到着次第」「到着し次第」のように動名詞が述語の場合スルが現れなくともよいが、この際ヲ格句が現れにくくなる。これはスルの存在とヲ格の認可に何らかの関係があることを示している。シダイ節自体これまでほとんど研究がなく、生起可能な動詞の種類といった基礎的な点から、コーパスのデータも元に詳しい記述を提示する。